



境内に咲く梅が、枝の一方にはまだ固い蕾がついているものの、おおかたの枝は、つばめが電線で押しつくらをするように、八重の花が咲き競い合い、何かのはずみに、むせる程に匂うようになりました。

「花は蕾から開こうとする時が、一番匂いが強い」と誰かが言っているのを聞いたことがありますが、花の香りの中に、春の訪れを嬉しく感じている昨今です。

自律の季節に際して

お彼岸は、亡き人を思い、無限のいのちの中に生かされている事にめざめる時節であり、それと同時に私達一人ひとりが、自分を律する時期ともいえます。

―彼岸と此岸―

「彼岸」とは「さとりの世界」という意味

六 智慧 目覚めよう仏の道に

これは普段から行なつてほしいことです。が、お彼岸の時期に改めて目覚めなくてはならないことは、自分を律することが、そのまま仏道に入り、安心立命（安心して生きていくこと）の生活がかなうということなのです。

春の暖かい陽ざしを受けながら、お寺参りに出かけましょう。

花を手向け、線香を上げて



手を合わせます。その時、自分を律する営みが、いのちの世界にあるあなたと亡き人への思いを深くしているはずです。

あまることなく、欠くることなし

長い歳月の間には思い出すと、背中が汗ばむような恥ずかしさや悔いのある出来事の一ツや二ツ、大小の差こそあれ、誰にもあるものです。

であり、この彼岸に対応する語として「迷いの世界」を表わす「此岸」という言葉があります。

春分の日を真ん中にしたこの時期を、「彼岸」と呼んでいるのは「此の岸に生きるわが心を、悟りの世界に少しでも近づけよう」という意味合いがあるのです。では、どのように自分を律すればよいのでしょうか。法句経に、己こそ己のよるべ

己をおきて誰によるべぞ
よくととのえし己にこそ

まこと得難きよるべぞを得ん

とあります。その実践の徳目として六波羅蜜、即ち六つの仏行が説かれています。

- 一 布施 与えよう物でも心でも
- 二 持戒 生きよう仏らしく
- 三 忍辱 耐えようどんなことにも
- 四 精進 努めよう自分の仕事に
- 五 禪定 落ち着こう息を調べて

法事の席でのこと。

私の中学の時の同級生が、子供達を連れて来て、私の前に座らせ、

「お前達、いつも話している坊さんだヨ。

どんなに悪くても、ちゃんとやれば、偉い人になれるんだぞ」と突然言いました。

私は、「オ、オイ、お前さん。どんな話しを子供達にしているんだヨ。たのむヨナ！」と笑いながら言つたものですが――。

私共姉弟三人は、私が中学に入った時、私共が育つた池上の眼蔵寺で、子供三人で生活をするのを余儀なくされました。というのは半身不随になった祖父の看病の為父母は玉宝寺に入つてしまつたからです。ですから夕食は、玉宝寺へ食べに行き、夜食べ終わると池上の寺まで歩いて帰る毎日でした。もちろん学校へ弁当など持つていけない訳がありません。

私はもともと短気なのか、気が荒かつた

のか、すぐケンカやなぐり合いを始め、いささか今でいう問題児でありました。法事の席で、子供達に話した同級生の話しも、きつと、乱暴者だったとかケンカ早かったといった類のものであったことでしょう。しかし私は、そういう時を過ごしてきたから、弱い者の気持ちも又恵まれぬ者の気持ちも理解できるし、やさしくありたいと自分が生涯決心した覚悟も持てたのだと、言い切ることができるのです。



又私の師匠（父）は、私を坊主として仕込むのに、今では考えられない仕込み方をしたものでした。

中学の頃、テスト前に勉強をしていると「勉強は、暇をみつけてするものだ」と言つて、たとえテスト前でも、墓の草むしりや本堂掃除をさせられたものです。

されていました。

私達坊さんの食事作法は、一ツ一ツ食器をいただき、食べるのが作法とされています。左手にご飯茶碗を持ったままで、右手でおかずをつまむと、いきなりゴツンとゲンコが飛び、食器が触れ合い音が出ようものならゴツン、「それは、坊さんの食べ方ではない」と叱責されるわけです。

これこれこういうわけで、こんなことをしてはいけないのだよという説明が何一ツなされないで、いきなり飛んでくる鉄拳は幼い身には大変な恐怖で、とにかく夕飯は早く食べ、逃げ出すことが第一と、それのみ考えていました。

しかし、私が本山修行に行つてはじめて、その作法がなんであるかということが理解でき、同期の修行仲間が作法が身につかず、少ししか食べられない時期、私は山盛



中学の教員もやつていた父であり、勉強の大切さをわかつているはずなのに、勉強をさせない。

「働けない者が勉強をすると、ろくな事にならない。せいぜい、サギ師になるだけだ。働け！」と言うのです。格別、勉強が好きというわけではなかったものの、墓掃除をしている横を、教科書やノートを片手に、寸暇を惜しんでテスト勉強をしながら下校する友を、複雑な思いでみていたものです。

又この頃では、食事を家族そろつて取る家庭も少なくなつたようですが、ひと昔前は食卓での家族それぞれの座る位置も決まつており、皆で食事を揃つてとつたものでした。又あの頃は、どこの家でも父権が強く、私の家もご多分にもれず父の座は不動のものであり、食卓とその坐る位置も決まつていたものです。私は師匠の右隣りで、まことにゲンコの飛びやすい位置にすわら

り食べて、古参和尚（先輩の和尚さん）か

ら「新参のくせに、食べ過ぎ」と叱られるぐらい、私の作法は身につけていたのです。

何をしても師匠にはほめられた思い出は無く、絶えずどなられるかなぐられるかしていたという記憶しかなく、思い返すと淋しい子供時代だったと、いつも思っていたものの、この時は、師匠のゲンコがありがたく感じられました。

このように、とてもつらい、いやな思い出も過ぎ去る日々の中に、又本当に苦勞した日々の中に生きていくものだと思えたのです。



当寺も皆様のご協力のおかげでアチコチよく整備されてきたとの喜びの声を耳にする機会も多く、寺へ関心を持つて下さる方が、ここにもいらしたと、うれしく思います。

私信

墓地、境内地をみまわるたびに、供えられるお花の多さに驚きます。中にはおもちややお菓子も墓石の台座に並べてあるのを見ると、ある種の感慨にとられます。

経済大国といわれる程、お金が動き、科学の世紀といわれる程、技術の進歩は目ざましいのに、やさしい人間の心はどんどんやせ細ってしまい、心の公害が原因で家庭の不和や社会の混乱が起きているように思える現今、よく「ほとけ（仏）ほつとけ」などといって、お墓へ埋めつばなしで、きれいに縁が切れてしまったかのような割り切った考えの人も、たまにいるようです。そんな現状を憂うにつけ、お墓に供えられるおもちややお菓子を、亡くなった人が本当に喜ぶだろうかといった理屈や理論ではなく、そんなことは抜きにして、そうせざるにはおれない、心のうちからほとばしり

私信

墓地、境内地をみまわるたびに、供えられるお花の多さに驚きます。中にはおもちややお菓子も墓石の台座に並べてあるのを見ると、ある種の感慨にとられます。

経済大国といわれる程、お金が動き、科学の世紀といわれる程、技術の進歩は目ざましいのに、やさしい人間の心はどんどんやせ細ってしまい、心の公害が原因で家庭の不和や社会の混乱が起きているように思える現今、よく「ほとけ（仏）ほつとけ」などといって、お墓へ埋めつばなしで、きれいに縁が切れてしまったかのような割り切った考えの人も、たまにいるようです。そんな現状を憂うにつけ、お墓に供えられるおもちややお菓子を、亡くなった人が本当に喜ぶだろうかといった理屈や理論ではなく、そんなことは抜きにして、そうせざるにはおれない、心のうちからほとばしり

出た、亡き人をいたみ追慕する・・そんな気持ちをもった美しい行為だと改めて私は胸が打たれるのであります。死んでも粗末にされない生き方をしたいに、姿なきものをも優しく思つてあげられる、豊かな心をもちたいと思つてあげられる、これらはとりもおさず、慈悲心の実践なのだと思ふからです。



○目玉丸めな

いつの日か
力となる

口とがらすな
物は言い様で 角が立つ

出た、亡き人をいたみ追慕する・・そんな気持ちをもった美しい行為だと改めて私は胸が打たれるのであります。死んでも粗末にされない生き方をしたいと思つてあげられる、これらはとりもおさず、慈悲心の実践なのだと思ふからです。



○目玉丸めな

いつの日か
力となる

口とがらすな
物は言い様で 角が立つ

